

古 い 処 方 集

「小児方鑑」と「救民妙薬」

芳 賀 義 昭 *

昭和57年4月30日、山田運治郎氏がひょっこり職場へ見えられた。氏は昭和49年3月、当所を定年退職された方である。古い和綴じの処方集を、2冊携えておられ、「役に立つものならば寄贈したいので、目を通して欲しい。」とのお話である。物珍しくもあって、有難く頂戴した。氏は現在秋田市内に住んでおられるが、出身は「またぎ」で知られる県北地方の山深い里、阿仁町である。氏の御祖父卯助氏、ならびに父君福蔵氏は、共に漢方医を業とされた方で、この処方集は2冊共、御祖父の代から伝えられたものゝ由である。1冊は「小児方鑑卷之二」、また1冊は「救民妙薬」と表題があり、何れも和紙に木版刷りしたものである。このように古い書物には、日頃接する機会もないが、興味の趣くまゝ、少し目を通してみた。

調べながら得たことや、感想などを混じえて、あらましを紹介しようと思う。

小児方鑑卷之二

大きさはB5版の半分程で、縦12.5cm、横18.5cmの横長に開く体裁である。古びて黒ずみ、表紙はいたんで、地の藍色がまだらにはげ落ち、表題もさだかではない。頁に欠落はなく、紙数は表紙共で30枚である。表題はあるものゝ著者名、刊行所、刊行年等は見当たらない。本文は片仮名混じりの漢字で書かれ、現今の小さな活字を見なれた目には、一字一字がすこぶる大きい。大小幾分不揃いで、大きい文字は縦・横1cm程もあろうか。けれども漢字には丁寧にルビが振られ、句読点はないが割合読みやすい。

卷之二とあるので、何分冊かの中の一冊であろう、と考えてはいた。幸いにも国会図書館専門資料部からご教示を頂き、手掛りを得ることが出来た。それによれば、本書は国書総目録¹⁾に収録されており、次のように記されている。

「小児方鑑 五巻 五冊、別称 小児衆方規矩、分類 医学、著編者 蘆洋、成立 貞享三年、版本 九大・京

大富士川」

これに基づいて、京都大学から卷之一巻頭の序文のコピーを頂くことが出来た。このコピーと山田氏から頂いたもの(山田本)とは、筆跡等から推して同版らしい。序文は漢文で書かれ、大意次の如くである。

〔小児の医療は本人がものを云えないだけに難しい。治療法を間違えると、あたら死なせたり、苦しませたりすることになる。先輩の中には、すぐれた方法を用いて、効果をあげるものがある。そうした事を見るにつけ、私はそれを模範として来た。そのようにして得たことを、こゝに出版する。貞享丙寅七月十七日 赤縣蘆洋、題於橘泉堂〕

この序文から出版の動機を伺うことが出来る。著者蘆洋については不明であるが、宗田一氏²⁾によれば、「当時小児科医療領域における、漢方の啓蒙用ないしは解説書として、刊行されたもので、その内容は一般人向であると同時に、医家にとっても充分使用可能で、可成利用価値の高いものであったらしい。」とのことである。貞享丙寅(ひのえとら)は貞享三年(1686年)で、治政は徳川五代將軍綱吉の時代である。綱吉は生類憐みの令で知られるが、学門を奨励したこと等もあって、蘭学が大いに入ってきた頃である。

本書の内容は、本文全体が症状に従って大きく11項目に分類され、更に細かい「症」による区分があり、その各々について、適応する処方と並べる形を採っている。各「症」は夫々相当の字数を裂いて説明が付され、随所に服用量の加減や、処方の一部を変える等、適当なヴァリエーションがあり、更に服用に対する注意事項なども記されている。全処方数は110を数えるが、重複もあるので、それを除くと85種になる。これらの中には現在尚用いられているものが数多く見受けられる。(表1)剤形は煎剤(55種64.7%)、丸剤(27種31.8%)、散剤(2種2.3%)、外用塗布剤(1種1.2%)で、塗布剤の1種以外総て内服薬である。内服薬が多いのは卷之二が内科的疾患を記述している故であろう。煎剤が最も

* 秋田県衛生科学研究所

表1 小児方鑑 卷之二収載処方

症 状	処 方	症 状	処 方	症 状	処 方	症 状	処 方
癖 疾	浄府湯 消癖湯 補中益氣湯 抑肝扶脾湯 千金消癖丸 消積香散 清木香榔丸 枳朮肥兒丸 四味蘆薈丸 大保和功散 五味異功散 錢氏白朮湯 六君子湯	脾 胃	香蘇散 羗活功子湯 異君解散 六八	腹痛 (附虫痛吐蚘)	消食湯 砂平胃散 六神散 開導氣湯 姜桂氣湯 大七梅氣湯 椒虫湯 追使君散 練陳散 追虫丸 集効丸	吐 渴	四神丸 胃功散 補中益氣湯 六君子湯 四君連丸 香連益氣湯 補中參理中丸 人參異功散 五味露散 五玉黃散 瀉
諸 熱	大連翹飲 羚羊犀散 生犀散 導赤散 惺々散 五福化毒丹	傷 食	萬億丸 太和散 消食散 平胃散 香砂正氣散 藿香中脾丸 清中解脾丸 啓保嬰丸 保食和丸 神仙萬丸	嘔 吐	人參散 定吐紫核湯 定吐中湯 保二陳功散 異六君子湯	吐 不ノ	錢氏白朮散 加味胃功散 不換金正氣散 加減茹苓湯 五香正氣散 藿助胃膏 五助胃丸 香連白丸 溫連露散 玉啓脾丸 啓金棗丸 燒針丸 木瓜丸 小丁香十陳皮 參胡三白湯
感 冒	惺々散 人參敗毒散 人參蘇飲湯 羗活湯 大羌活湯 脫甲葛散 香	腹 脹	消脹散 史君子丸 異功散 六君子湯 補中益氣湯	泄 瀉	益理胃散 四功冷散 參苓白朮散 益黃散 胃苓湯 補中風湯 香砂六君子湯		

多いが、煎じ方に姜棗水煎、燈草水煎、竹葉水煎等がある。これは飲みやすく、且つ藥効を助ける手立として、よく用いられる方法で、例えば姜棗水煎と云うのは、生薑と棗を入れて水で煎じよ、と云う意味である。姜と棗に特に分量を示していないのは、両者共に昔は藥物ではなく、食物と見なされていたからで、医師の考え方や、病人の好みによって、その量を適宜決めていたことによるものであるという。

また本書の字句には難解なものが多い。特殊な熟語が多いのである。漢方古書の熟語をそのまま踏襲しているためであろう。漢方古書の解釈の難かしさは、西山英雄氏がその著漢方医語辞典³⁾の序文に簡潔に尽されている。曰く「古書を読む際に難解の字句が出た時は、漢和辞典を見ればすぐに解決するはずである。しかし漢方の古書に現われる字句は、先哲が思い思いに勝手な字句を使っているの、普通の漢和辞典では用足しができない。どうしても特殊な辞典が必要になってくる。」と。例えば「夫癖塊ハ嬰兒飲食調ヲウシナヒ三焦関格シテ以テ腸胃ニ停滯スル事ヲ致シ……」(小児方鑑卷之二冒頭)と云う文章がある。この中の「三焦関格」であるが、

「三焦」は一般の辞書でも引ける。(三焦 漢方で六腑の一。上中下に分れ、上焦は心臓の下、胃の上、中焦は胃の中、下焦は膀胱の上にあつて排泄をつかさどるといふ。三焦、) (広辞苑)しかし漢方の古書を調べる場合、それだけでは不充分であつて、種々の意味に使われるので、それについても考えておく必要がある。〔三焦を場所的に区別すれば上焦(横膈膜より上部)中焦(上腹部)下焦(臍以下)となる。○特定の臓器として扱われるときは臓腑に該当させることがもっとも妥当であり、便利であろう。新しい三焦の解釈として、ホルモン説、リンパ管説、体腔膜説、酵素説などがあるが、それらをすべて総括したものが内経にいう三焦であろう(矢数道明氏)。○漢方の臨床誌第十五卷第一〜四号・柴崎保三氏の「三焦について」参照。〕 (漢方医語辞典)。次に「関格」であるが、これは一般の国語辞典や漢和辞典には見当たらない。結局、漢方医語辞典によって初めてその意味を知ることが出来た。〔関格○慈航・巢源に、大小便不通なり、大便不通を内関といい、小便不通を外格という、○死に頻する脈をいう。〕また「脾」あるいは「脾胃」と云う語がしばしば出て来るが、この「脾」は

一般の辞書には大抵「五臓の一つ、脾臓の事」と説明されている。しかし古い漢方で云う「脾」はそれと異なる。

〔脾〇現代医学の脾臓ではなく、脾は飲食物の分解排泄及び水分代謝を、主として司るものとしている。〕（漢方医語辞典）とあって、同じ言葉でも、古い時代と現代では、その意味が異なることがあり、注意が必要である。

分量の単位も様々で、匁、分、両、銭などが見られる。漢方薬と民間薬⁴⁾、本草概説⁵⁾に古い時代の中国の度量衡について、若干の記載があるが、長い歴史の中で、色々変遷や混乱があったようである。本書に限って云えば、本書編さんの頃、つまり約300年前の本邦における薬種の分量、と云うことになるが、現在の我々の通念に従って、1匁=3.75g、1分=1匁の $\frac{1}{10}$ 、1両を4匁(15g)と考えて大きな誤りはなさそうである。銭は匁の古い言葉である。処方に記された分量は勿論1日当りの用量を指しているが、分量の記載の無い処方も数例見られる。これは適当量と考えて差支えないのであろう。しかしこのような処方を漢方に云う「証」に応じ、自在に操るためには、豊富な経験と深い洞察が必要とされたであろうし、いわゆる「匙加減」が重要視されたであろう。丸剤の大きさは漢方では古来、緑豆大、黍米大と云うように、穀粒や果実の大きさをもって示したようで、本書でも次のようなものが出て来る。

緑豆、黍米、龍眼、芍実、棗核、粟米、麻子、彈子、椒目、黃豆

これらは往時、身の回りによく見られたものなのであろうが、現代の我々には殆んどなじみのないものばかりである。西山氏³⁾によれば麻子は麻の実の大きさと、0.1g見当、彈子は昔の鉄砲玉(散弾)の大きさと、2~3g見当と云われる。

本書にはまた、数種の文献の引用がある。「婴童百問」「嬰保全書」「方考」「正伝」等で、「〇〇ニイワク……」或いは「××ニ……」と云う形で書かれている。この文献引用とは別に、「東垣」「銭氏」「湯氏」「薛氏」等が見られる。これは「〇〇ノイワク……」と云う形で書かれているので、人名であろう。いずれも中国の古人で、恐らく斯道の大先達と考えられる。国書総目録¹⁾や本草概説⁵⁾の中にも、これらの文献名や人名を見ることが出来る。江戸時代初期には、既に種々中国の古書が渡来し、翻刻や抄出がさかに行なわれ、また邦人の手に成る医薬の書、いわゆる本草も大いに刊行されていたようである。

救民妙薬

大きさは縦10.5cm、横15.5cmで、小児方鑑同様横長に開く体裁になっている。同じ程度に黒ずんでいるが、傷みは一層ひどい。表紙も失なわれ、前と後に欠落があ

る。欠落した枚数は不明であるが、残っているのは、目次2枚と、それに続く本文44枚の計46枚である。文字は漢字混じりの平仮名で、漢字には大部分ルビが振られているが、平仮名は異体字(変体仮名)が多く、漢字には一部草書体も混じり、慣れないと読み辛い、文字の大きさは小児方鑑と同じ位である。

目次の末尾に「救民妙薬目録」とあるので、表題が判明した。この標題をもとに、多くの方からご教示を頂く事が出来た。就中畏友吉田慶嗣氏に負う所は極めて大きい。貴重なご意見や資料を、数多く頂戴した。また特に記して置きたいのは、エーザイ株式会社内藤記念くすり博物館のご好意である。同博物館からは山田本に欠けた部分全部をコピーで頂いた。そのお蔭で欠落を補い、通読が可能になり、全容を把握出来るようになった。山田本の前に4枚、後に11枚計15枚が付け加えられるので、その紙数は表紙共で61枚になった。エーザイ株式会社から頂いたコピーと山田本では、筆跡その他から推して、明かに版が異なる。しかし両者の重複部分を照合した限りでは、内容は両者全く同一と思われる。山田本の目次の一部に、作版のミスと考えられる部分があるが、それ以外は全く相違がないので、一貫したものとして話を進める。初めに序文があって、その大意は次の如くである。

〔大君から私は次のような命を受けた。「辺地に生活する人々は、医療や薬に恵まれず、苦しんでいる。入手しやすい薬方を集成して与え、これらの人々を救うように」と。その命を承って、その土地で求めやすい薬方397方を編集し、辺地に暮る人々にこれを与える。人々を救う一助ともなればと望んでいる。元禄癸酉歳、常陽水戸府医士穂積氏甫庵宗興撰〕

以上に本書を著した動機が明らかであるが、これから何うことが出来るように、本書は民間薬や民間伝承の治療法を集成したものである。元禄癸酉(みずのととり)は元禄6年(1693年)である。小林正夫氏⁶⁾によれば、著者穂積甫庵は水戸光圀の侍医であった由である。また、エーザイ株式会社⁷⁾によれば、救民妙薬は光圀がつくらせたわが国最初の家庭医学書とのことである。これらのことから、文頭の大君とは、水戸光圀を指すものと思われる。

序文に続いて、目録つまり目次があり、疾病ないし症状等が130項目程列記されている。(表2)本文は目録の順に従って、夫々に処方や治療法を記す形を採っている。処方数は序文にもあるが、397方を数える。このうち内服薬は166方42%、外用薬が231方58%である。剤形の種類は多い(表3)が、中には食品のように「味噌汁で煮て食する。」と云ったものもある。材料は植物に限らず、動物由来のものも多い(129方、32%)。利用

表2 救民妙薬目録

1 中 風	23 痔 の 薬	45 くさかさの薬	67 齒くさの薬	89 つ き 目 薬	111 くさたむしの薬
2 疫 癘	24 痢 の 薬	46 すねくさの薬	68 齒 痛 はぐきただれ	90 つ き 目 うはひそこひ	112 補 薬
3 食傷并諸毒解	25 白 禿 瘡 薬	47 風 疹 薬	69 齒 動 痛 薬	91 や み 目 薬	113 無病延命の術
4 鯉に酔たるに	26 頭 瘡 諸 瘡	48 諸 瘡 薬	70 齒 痛 薬	92 目の諸病に	114 救 卒 死 方
5 河豚に酔たるに	27 狐 臭 薬	49 灸 瘡 薬	71 虫 齒 薬	93 風 眼 薬	115 旅立する者 胡椒持事
6 諸 魚 毒 解	28 鼠 瘻 薬	50 漆 毒 薬	72 氣を つ め に 齒を 動 痛に	94 脚 氣 薬	116 他国へ行者 田螺を持事
7 菌 魚 毒	29 爛 癰 薬	51 霜 焼 薬	73 小 児 舌 胎	95 瘡の截薬	117 寒水の事 内服する
8 諸 毒 解	30 魚 目	52 痰 の 薬	74 口中たゞれ	96 瘡 の 薬	118 食傷に食事用事
9 水蛭を飲たるに	31 水 腫 薬	53 治 霍 乱	75 頭 痛	97 鼻 血 の 薬	119 痢 病 に 食事用事
10 酒 毒 に	32 小 便 閉 薬	54 手 足 痛 薬	76 眩 暈	98 血 ど め	120 をこり病で 後の事
11 生肉食して毒に	33 大小便閉薬	55 ひ や う そ	77 翻 胃 薬	99 吐 血 薬	121 熱病の後の事
12 蠅(かに)の毒に	34 小 便 頻 数	56 疔 耳	78 乾 嘔 薬	100 下 血 薬	122 酒并焼酒を のみての事
13 蛇 咬 の 薬	35 大 便 閉	57 耳 中へ虫 入たる時の薬	79 吐 酸	101 湯 火 傷	123 鹿を食する 人の事
14 蜈蚣咬の薬	36 淋 病 薬	58 耳 聾 薬	80 五 膈 薬	102 乳 癰	124 鳳仙花の事
15 蜂螫たるに	37 小 児 淋 病	59 寸 白 薬	81 吃 逆	103 痢 病	125 玉 簪 の 事
16 毒魚刺たるに	38 諸 淋 薬	60 胸 虫 薬	82 打 身 薬	104 赤 血 帶 下	126 初生の小児 齒のはえる事
17 鼠 咬	39 疔 薬	61 疝氣寸白薬	83 接 骨	105 難 産 薬	127 小児乳汁許の事
18 鼠の小便目に入	40 癰 疽 薬	62 疝氣陰囊腫薬	84 小児五疳薬	106 胎死腹中痛	128 墮 胎 之 事
19 簀 刺 の 薬	41 諸 腫 物 薬	63 疝 氣 薬	85 小 児 瘡 薬	107 胞 衣 不 下	129 食 物 に あやまち有事
20 矢 根 其 外 鉄の立たる薬	42 諸腫物小瘡内薬	64 積 寸 白 薬	86 小 児 瘡 瘡	108 下 疳 妙 薬	130 くいあはせの事
21 喉にとげの 立たる薬	43 ねぶとの薬	65 喉 痺 薬	87 痘瘡目入に	109 腹 痛	
22 脱 肛 薬	44 肥 前 瘡 薬	66 咽 喉 腫 痛	88 雀 目 薬	110 たむしの薬	

出来るものは恐らく何でも用いたのであろう。処方の中から珍らしいものを数例挙げてみよう。文体は適宜変えた。

④蛇咬の薬

鉄砲薬(火薬)をさし口(かまれた傷)におき、火をつける。[いさゝかあらっぱいが、応急の処置としてうなずける。]

⑥喉にとげのたちたる薬

紙を二寸四方ばかりに切り、四方の端に糊を付けて喉にはり、其の中へ袋蜘蛛を生きたり入れ、中で動くようにして、二時(とき)ばかりおけば、骨が抜ける。[随分くすぐったいと思う。そのため喉の筋肉をあれこれ動かすので、効果があったものであろうか。]

⑩魚目(うおのめ)

白米1粒うおのめにおし当て、小刀の先にて米の上に十の字をかき、溝の中へすてれば、米くちたる時、うおのめがなえる。[多分に呪術的な感じがする。]

また内服薬、外用薬を問わず、材料を黒焼にして用いる例が思いの他多い(99方、24%)、これは漢方のいわゆる霜(そう)に倣ったものであろうか。此の時代であるから、民間薬とは言いながら、漢方の影響も当然色濃く受けていたであろう。例えば「牽牛子」「薏苡仁」「車前子」などが見られるが、これらは千年以上も昔、中国で編集された漢方の書「新修本草」の中に、既に見出されるものである。「実証」「虚証」と云った熟語も見られるが、これも漢方に固有のものである。

本書の内容は大部分が疾病の治療を目的としたもので

表3 救民妙薬 剤形

内服薬 166方	散	剤	76方
	煎	剤	46
	丸	剤	11
	浸	剤	3
	その他		30
外用薬 231方	塗布	剤	188方
	洗滌	剤	18
	罨法	剤	7
	貼付	剤	4
	燻	剤	4
	坐	剤	3
	その他		7

あるが、後の方には様々な健康管理ならびに予防の為の心得が記されている。いくつかを拾って、その大意を記してみる。

④無病延命の術

鳥獸を見習うのがよい。鳥獸は飢えれば食うし、満腹すればやめる。人間は味覚を満足させるために、満腹の上にも尚食する。食欲のみならず、性欲についても同様である。その結果脾胃を破り、腎を損する……」。

⑤墮胎の事

墮胎は不仁の第一である。やむを得ず行うにしても、服薬によるよりは、さし薬による方がよい。母体が丈夫であれば此の方がよく、簡単である。貧乏な者が子を間引くと云って、墮胎するなどはもっての外である。

⑥食物にあやまち有る事。

蓮実や蓮根は無毒であるのに、毒あるものとして、食わずに捨てゝいる。鶏や犬は家畜であるのに、美味いからと云って、殺して食うのは大きい罪である。殺生は同じでも、人に益あるものと、害ある物は区別しなければいけない。

以上に書かれた事柄は、何れもけだし卓見と申してよろしいかと思う。

本書の数多い処方の中には、充分効果の期待出来るものもあるが、一見奇抜な、迷信と思われるものもなくはない。

「竄にかまれた時は、猫の尿を糊でやわらげて付け

る。」

「竄の小便が目に入った時は、猫の涎をさす。」

「みゝだれには兎の糞を火に焼き、其のけむりを耳の中に入れる。」

などはその例である。小林氏⁶⁾も「迷信的で役にたゝないものが多いとすれば、陰陽五行説的な迷信にわざわざされているためだ、と云うことが出来るだろう。」と述べている。因に陰陽五行説とは広辞苑によれば「古代中国に起源をもつ哲理。一切の万物は陰陽二気によって生じ、五行中、木・火は陽に、金・水は陰に属し、土はその中間にあるとし、これらの消長によって、天地の変異、災祥、人事の吉凶を説明する。」とある。

以上がたまたま入手した、2冊の古い処方集について、知り得た事や感じた事どもである。興味本位にひもといてはみたものゝ、一気呵成に読み下すことなど到底出来なかったし、あれやこれや時間を要した。しかし苦勞しながらも、300年前の医療はこんな風でもあったろうか等、色々憶測しながらの行程は結構楽しかった。小児方鑑もいつか全巻を読み通してみたいものである。肌合いの全く異なる2冊ではあるが、共に先人の労苦がしみじみしのばれて、今は肅然たる思いである。雪深い東北の山里に、此のような書物が、代々伝えられていたことを知り、私達の先祖の生き様に、直接ふれたように思えてならない。病苦を乗り越えるための、切実な願いが、遠く聞えて来るようである。内容が科学的か否かは、即断を避けるとしても、石を捨て、玉を選んで、みがいて行くのは、我々の責務でもあろう。此のような書物を残してくれた先人の前に、頭を垂れるのみである。此の2種類の処方集は、或いは全国的に散在しているものかも知れない。ご存知の方も多いのではなからうか。解説に当り、種々ご教示を頂いた事については、文中にも記したが、それ以外にも、多くの方からご指導を賜わった。改めて感謝の意を表する次第である。おく面もなく、紹介文に手を染めてはみたが、非才のそしりは免れまい。内心じくじと云ったところである。小児方鑑の叙文の結びを、そのまゝ拝借して、拙文の結びとする次第。

率意妄書恐多差謬更俟具眼之是正云爾

文 献

- 1) 国書総目録、岩波書店 (1966)
- 2) 宗田一、日本医史学会 談 (1986)
- 3) 西山英雄；漢方医語辞典 (1981)
- 4) 西山英雄；漢方薬と民間薬 (1978)
- 5) 岡西為人；本草概説 (1977)
- 6) 小林正夫；KEN MOOK 薬草大百科, 162 (1984)
- 7) エーザイ株式会社；朝日新聞, S 62.3.30, 11版 (20) 広告